平成２５年度　人権教育推進リーダー研修講座（Ａ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２５年７月２２日（月）　奈良県産業会館　５階　大会議室

２　参加者　小学校　７３名、中学校　５７名、県立学校　２０名、私立学校　１名、
その他　７名　　計　１５８名

３　日　程　13:10 ～ 13:30　説明
「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」
担当　人権・地域教育課人権教育係　指導主事
13:30 ～ 14:10　実践報告「学び合い、育ち合う仲間づくりをめざして」
奈良市立都南中学校(平成２３・２４年度人権教育研究指定校)
14:20 ～ 16:00　講演「安心できる学校づくり―大津いじめ事件から考える―」
和歌山大学教授　松浦善満

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」

○　人権教育学習資料集「なかまとともに」作成の理念、教材の展開例などについての説明。

(2)　実践報告「学び合い、育ち合う仲間づくりをめざして」

・親和的な集団づくりのために、ＱＵテストを実施している。これにより、普段は目立たない生徒のおかれている状況がどういうものなのかを把握できる。

・ＱＵテストの結果をもとに、特定の子どもに対する取組を明確化するために担任が作成した「手だてシート」を学年で共有し、今後の取組に活かしている。

・平和と戦争について考える取組では、教師の話を聞くだけではなく、子ども自身が主体的に考え、行動できるよう実行委員会による活動を進め、生徒の主体性を育むことができた。この取組において、２年生では、生活背景に課題を持ったある生徒が、作文発表を行い、周りの生徒は、その思いを泣きながら受け止めた。卒業時には、「この学年で卒業できてよかったな」という声をきくに至った。

(3)　講演「安心できる学校づくり―大津いじめ事件から考える―」

１　現代社会といじめ問題

子どもたちは、学級やクラブのメンバーよりも好きなもの同士の集まりを重視している、自己肯定感の二極化が進行している、また、「評価社会」化と自己責任性の強調により新型うつ病が増加している等、社会の変化を教員も知っておくべき。

２　大津いじめ事件から考える

・学級日誌から、４～５月は学級をよくしようという生徒たちの様子があったが、その後、崩れだし、９月には、授業中の立ち歩き、教室から出て行くなどが常態化していた。その中で、いじめの日常化が進み、本人は屈辱感・無力感・絶望感にさいなまれ自死に至った。

・いじめは急速に深化する。いじめは学級の荒れと併存する。教員は、子どもの状況や家庭背景などの事実に真摯に向き合う姿勢が重要。大津市立中学校では、養護教員からの発信を受け止めていなかった。

３　「脱いじめ」の展望

いじめの解決策として、日常の授業を教師主導ではなく、欧米の取組に学び、子ども主導にする必要がある。

・ピア・サポート授業（なかまで支える授業）岬町立岬中学校での実践。子ども同士が聴き合うワークショップを行っている。

・和歌山市立貴志川中学校（慢性的に荒れている状況がある）の実践。
教室掲示を小学校並みに工夫する。対面授業や扇形、コの字型の授業を取り入れ、対話のある授業をつくり、３～５割は生徒同士が学び合う。しっとりとした授業により、学校が落ち着いてきている。

５　アンケート結果

評　価	① とても役立つ内容	② 役立つ内容	③ 余り役立つ内容ではない	④ 役立つ内容ではではない	満足度 ①＋②の平均
説　明	３０．６％	６３．６％	５．８％	０．０％	９４．２％
実践報告	２０．０％	７２．０％	８．０％	０．０％	９２．０％
講　演	６７．５％	３１．７％	０．８％	０．０％	９９．２％
平　均	３９．５％	５５．６％	０．５％	０．０％	９５．１％

平成２５年度　人権教育推進リーダー研修講座（Ｂ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２５年７月３１日（水）　奈良県社会福祉総合センター　大ホール

２　参加者　小学校　８３名、中学校　３１名、県立学校　２５名、私立学校　０名、
その他　１４名　　計　１５３名

３　日　程　13:10 ～ 13:30　説明
「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」
担当　人権・地域教育課人権教育係　指導主事
13:30 ～ 14:10　実践報告「聴き合い学び合う授業づくり」との出会いとあゆみ
桜井市立大福小学校(平成２３・２４年度人権教育研究指定校)
14:20 ～ 16:00　講演「力のある学校づくり」
大阪大学大学院教授　志水宏吉

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」

○　人権教育学習資料集「なかまとともに」作成の理念、教材の展開例などについての説明。

(2)　実践報告「聴き合い学び合う授業づくり」との出会いとあゆみ

・厳しい生活背景の中、自尊感情が十分に育まれないまま学習意欲を低下させている児童が多いという実態に対し、最も多くの時を費やす学校の授業を通じて聴き合い学び合う関係を築き、確かな学力を獲得させることをねらいとして、取組を進めた。
・講師を招いての職員研修や研究授業を通して、学び合う授業づくりにおける発問の仕方や教員の立ち位置など、授業力を高めることに努めた。
・ペアやグループといった少人数でのコミュニケーションを図ることから、児童同士が分からないことを聴き合い学び合う授業づくりを進めた。
・研究授業（授業公開）を頻繁に行う過程において、全教職員が全校児童一人一人を丁寧に把握するようになり、そのことが児童の自尊感情を高めることにつながった。
・学び合いの授業づくりを通して、困っている友だちに関わろうとする学級集団が育っていった。

(3)　講演「力のある学校づくり」

１　人権教育と学力

・学力をつけることは、授業や補習だけではなく、学校全体、地域全体で取り組むもの
・人権教育と学力は同じもの。学校の活動はすべて人権教育である。
・人権教育の指導方法等の在り方［第三次とりまとめ］のポイントは次の３点。
①　小学生にも分かるように「自分の人権を守り、他の人の人権を守ろうとする意識・意欲・態度」という表現で、人権教育の目標を示した。
②　「人権感覚の育成」という視点を打ち出した。人権教育で育てたい資質・能力には、1)知識的側面（頭）、2)価値的・態度的側面（心）、3)技能的側面（体）の３つ。このうち、2)と 3)は不十分であり、これらに関係の深い人権感覚が十分に育てられていない。
③　「人権教育の成立基盤としての教育・学習環境」は最も大切な部分。

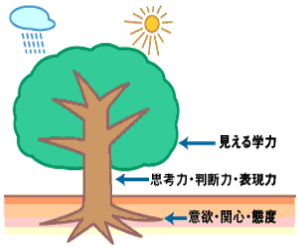
２　学力の構造―「学力の樹」

・Ａ学力（葉）は「知識、技能」…見える学力
・Ｂ学力（幹）は「思考力、判断力、表現力」
・Ｃ学力（根）は「意欲、関心、態度」…見えない学力
・Ｃ学力は、見える学力を支えている。子どもが内面にもっているすべてのもの。個性、性分、性根、自尊感情、どんな生き方をしたいのかというアイデンティティ。
・子どもにとっての優先順位はＣ＞Ｂ＞Ａ。
・「学力の樹」は葉と幹と根がバランスよく成長してこそ、力のある樹となる。
・学力格差を克服している「力のある学校」では、葉と幹と根のバランスを重視した教育活動を展開されている。
・「どうせやってもダメ」と思うのではなく、「一流ではないがコツコツがんばれば、自分なりにできる」と思えるように自己効力感を育成することが大切。
・学習習慣をつけることの方が、学習意欲を引き出すことよりも大事である。しっかり

本読みをする、宿題を終えてから遊びに行く、板書はきちんと写すといった習慣作りが大切。

・「わかった！」「友だちに教えて感謝された！」といった経験のある子どもには意欲が生まれる。授業を変えて、子どもの頭、心、体を活性化すること。

図表［5］「学力の樹」の考え方



3　学力格差の実態―「つながり格差」仮説

・子どもたちの学力格差は、「つながり格差」であると捉えている。

・1964 年の学力に関わる大きな要因は経済的要因であった。（都鄙（とひ）格差）

・2007 年では、「持ち家率」「離婚率」「不登校率」の３つが大きな要因である。

①　「持ち家率」が高いということは、地域とのつながりが密であることを示す。

②　「離婚率」が高いということは、家族と子どものつながりが揺らいでいることを示す。

③　「不登校率」が高いということは、子供たちと学校とのつながりの弱体化を示す。

→この３つの指標を総合して、「つながり格差」と捉えた。

・学力格差を解決するためには、「つながり」を、地域・家庭・学校の中で、あるいはその連携の中で、再構築していくしかない。

地域　…　子どもと地域の人、地域の人同士のつながり

家庭　…　家族のつながり

学校　…　子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師のつながり

4　格差を克服する―「効果のある学校」研究

・効果のある学校（教育的に不利な環境のもとにある子どもたちの基礎学力の水準を下支えしている学校）を探し出し、その特徴から「効果のある学校」となる要因を「スクールバスモデル」にまとめた。

①　エンジン（気持ちの揃った教職員集団）Taechers

②　ハンドル（戦略的で柔軟な学校運営）Organization

③　前輪［左］（豊かなつながりを生み出す生徒指導）Guidance

…　教師と子どもが信頼の絆で結ばれていること、集団づくりの充実

④　前輪［右］（すべての子どもの学びを支える学習指導）Effective teaching

…　研究発表会のときだけではなく、普段の取組を大切に

⑤　後輪［左］（共に育つ地域・校種間連携）Ties

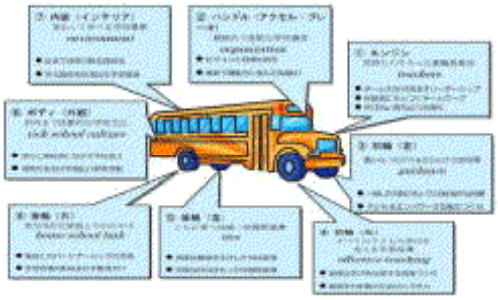
…　子どもだけでなく、大人も育つ。

⑥　後輪［右］（双方向的な家庭とのかかわり）Home-school link

⑦　インテリア（安心して学べる学校環境）Environment

…　かつて荒れていた学校で先代の校長が環境整備や掃除をしており中学生も無茶をしない。

⑧　ボディ（前向きで活動的な学校文化）Rich school culture



5　アンケート結果

評　価	① とても役立つ内容	② 役立つ内容	③ 余り役立つ内容ではない	④ 役立つ内容ではではない	満足度 ①と②の平均
説　明	１６．５％	７６．１％	７．３％	０．０％	９２．７％
実践報告	１７．４％	７０．６％	１１．０％	０．９％	８８．１％
講　演	４８．６％	４８．６％	２．８％	０．０％	９７．２％
平　均	２７．５％	６５．１％	０．７％	０．３％	９２．６％

平成２５年度　人権教育推進リーダー研修講座（Ｃ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２５年８月５日（月）　奈良県人権センター　大研修室

２　参加者　小学校　４７名、中学校　３１名、高等学校　９名、その他　３名
計　９０名

３　日　程　13:10 ～ 13:30　説明
「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」
担当　人権・地域教育課人権教育係　指導主事
13:30 ～ 16:00　講演・演習「学校とデートＤＶ」～子どもたちを被害者にも加害者にもしない～
講師　参画ネットなら　風味良美、松村徳子

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権教育学習資料集『なかまとともに』の活用について」

○　現在作成を段階的（本年度中学校用を作成）に進めている人権教育学習資料集「なかまとともに」の作成の意図、教材の展開例などについての説明を実施

(2)　講演・演習「学校とデートＤＶ」～子どもたちを被害者にも加害者にもしない～

１　ＤＶとデートＤＶ及びその背景について

・ＤＶとは親密な間柄で起こる暴力。性差別社会を利用して加害者が被害者に振るう暴力で、犯罪であり人権侵害である。親密な関係の中で起こるゆえに、長い間見過ごされてきた。
・結婚している女性で夫からの暴力にあったことがある人が３人に１人くらい。２０人に１人が殺されてしまうのではと思うような暴力をうけたことがある。夫に殺される女性は、１年間に約１２０人。
・ＤＶは子どもにも影響を与えている。暴力を目撃したり、被害者になったりすることで、頭痛、腹痛、多動、感情を示さない、学校を休む等の影響が出てくる。
・ＤＶが起こる要因にジェンダーバイアス（文化的・社会的に作られた性差のこと）がある。日本は、人間開発指数は１８７カ国中１２位なのに、ジェンダーギャップ指数は１３５カ国中１０１位ということからも、そのことを裏付けている。
・デートＤＶは、恋人や交際相手との間で起こる暴力であり、ＤＶ防止法があてはまらず、ストーカー規制法で取り締まられている。将来ＤＶに発展する可能性が高い。

２　子どもたちを被害者にも加害者にもしないために
・ＤＶを受けた人の４割は、どこに　もだれにも相談していないという　現状である。これくらい我慢するものという考えを加害者は持ちやすく、被害者も今を失うという不安から我慢してしまう傾向にある。

３　ＤＶをなくすために私たちができること。

・ＤＶを正しく理解すること。
・自分たちの夫婦関係を見直し、対等な人間関係のモデルになること。
・相談されたときは、あなたが悪いのではないと伝える、１人で解決しようとせず、相談機関などを進める、また自己決定することに寄り添い、応援することが重要である。

５　アンケート結果

評　価	① とても役立つ内容	② 役立つ内容	③ 余り役立つ内容ではない	④ 役立つ内容ではではない	満足度 ①＋②の平均
説　明	２６．４％	６５．３％	６．９％	１．４％	９１．７％
講演演習	４６．８％	４６．８％	６．５％	０．０％	９３．６％
平　均	３７．０％	５５．７％	６．７％	０．７％	９２．７％